

平窯についての予察

坂 詰 秀 一

一 はし が き

日本における還元焰窯業技術による窯業生産の出現は、四世紀の後半に遡ることが近時明らかにせられつつある。その時点における生産は、登り窯構造の窯によって焼成された須恵器であって、以降、須恵器の生産は登り窯によってなされているのである。一方、須恵質の埴輪の生産も五世紀中葉以後、地域を限定して登り窯構造の窯において焼成されていることが知られており、その下限は、現在のところ八世紀の初頭頃に求められる。

須恵器及び須恵質埴輪の外、陶棺の焼成も登り窯によってなされたものであるが、同じく還元焰窯業技術によって生産されていたものに瓦埴があげられる。

『日本書紀』崇峻天皇元年（五八八年）条に見える「百濟国遣_ニ恩率首信、徳率蓋文、那率福富味身等_ニ進_レ調。并献_ニ仏舍利、僧聆照律師、令威、恵衆、恵宿、道蔽、令開等、寺工太良未太、文賈古子、鑪盤博士将徳白味淳、瓦博士麻奈父奴、陽貴文、陵貴文、昔麻帝弥、画工白加_一。」の記事は、日本における造瓦技術の出現が六世紀の後半、百濟の

瓦博士によっていることを明らかに示している。それは、さらに、飛鳥寺の建立開始の年次とも符合し、瓦葺建築の開始が確実に六世紀の後半に考定しうる大きな根拠となっているのである。飛鳥寺の瓦窯跡は、寺域東南の丘陵斜面において発見され、その構造が、扶余東南里錦城山北麓において発見されているトンネル式有段登り窯と軌を一にしていることが確認されている。このことは、明らかに紀の記載を裏付ける一の資料ともすることが出来るのであるが、注意すべき点は、飛鳥寺瓦の造瓦手法の検討によれば須恵器工人の参劃が窺われることであり、その事實は、当時における須恵器工人層が百済の瓦博士の指導のもとに造瓦に従事したことを示しているのである。

六世紀代における須恵器の窯跡は、トンネル式無段登り窯構造を有していることはすでに知られている事実であり、その技術をもとにして造瓦専用のトンネル式有段登り窯を構築したことが察せられるのである。このことは、須恵器と瓦はともに還元焰窯業技術によることをもって特質としている点と決して無関係ではないのである。この様な登り窯構造の窯において生産された須恵器及び瓦磚などの還元焰窯業技術は一連の系譜をたどることが出来るのであるが、同一技術によりながら、窯構造を根本的に異にする平窯構造窯の出現が七世紀の末葉に求められるのである。

登り窯と平窯との構造的相異点は、焼成室の火床が傾斜を有するか否かによっているのであるが、それはあくまで具象的現象であって、その根底には、焼成室と燃焼室とを分離し、前者の火床に火道を構築していることである。また、生産物の焼成後の窯出し作業を、登り窯にあつては、燃焼室あるいは焚口部ときとしては煙出し部の一部を破壊することによっているのに対して、平窯にあつては、焼成室の天井部を除去することを基本としていたのであつて、きわめて対象的な構造を有するものである。

かつて、石田茂作は、「我国瓦窯は平安時代以降は専ら『平がま』式になり、『上りがま』形式は痕を絶った観があるが、その『平がま』形式の起源が既に奈良時代にあつた事は注意すべきである」(『飛鳥奈良時代—仏教考古学—」

『日本考古学入門』所収」と論じられたことがあった。

典型的な平窯の出現が平安時代にあることは、古くより、島田貞彦・後藤守一などによって指摘せられて来た通りであったが、戦後、この種の平窯の起源が確実に奈良時代前半に認められることが確認され、平窯に対する研究も新しい視角より試みらるべき必要性が提起されて来ているのである。

そこで、現在学界に報告されている資料を中心として、古代・中世における平窯構造瓦窯跡の遺例を可能なかぎり集成し、それに立脚して、今後における平窯研究の問題点を整理しておきたいと思うのである。したがって、小稿は平窯に対する筆者の研究の覚え書き程度のものであって、これを基礎として今後とも資料の集成と検討をつづけていきたいと思念している。識者のご教導を願って止まない次第である。

二 平 窯 の 資 料

造瓦用として構築された平窯については、巻末の文献目録によっても判かるごとくかなり古くより資料の報告が学界に提供されて来ていた。

それらの平窯資料については、未発表のものもかなりあり、現段階において集成を試みるのは難事であるが、一応ここでは管見にふれている若干の遺例について簡略に瞥見しておきたいと思う。

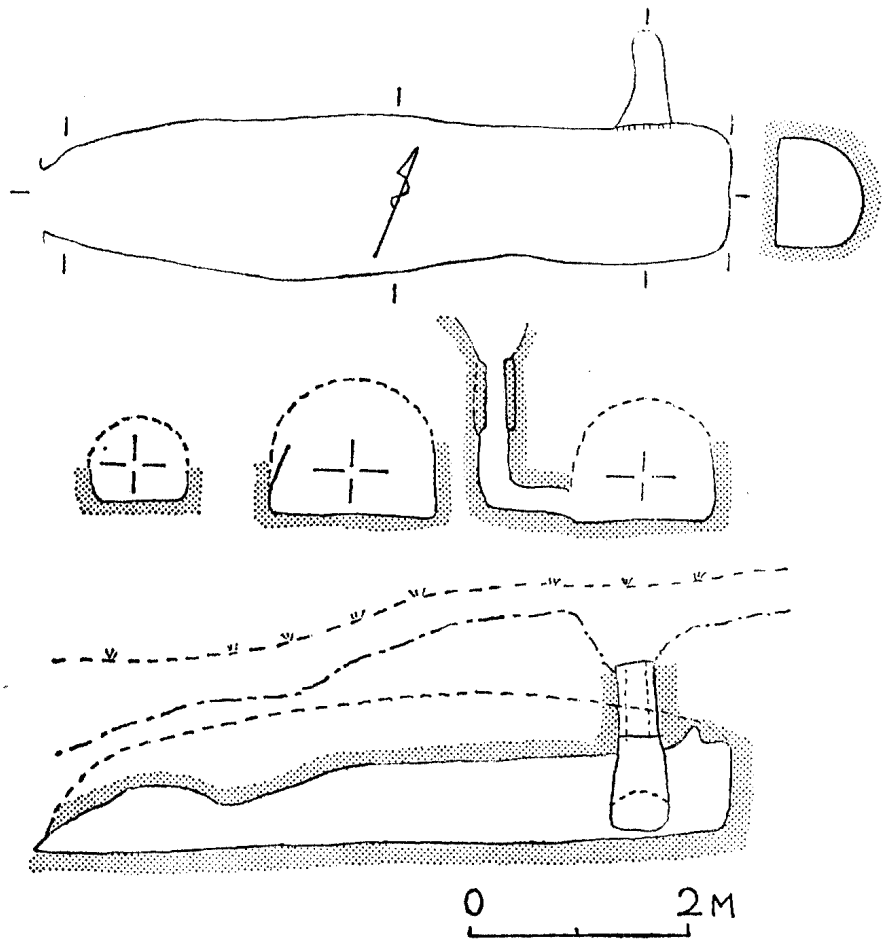
1 岩手県観自在王院（文献22）

岩手県西磐井郡平泉村の観自在王院の東側に鎌倉時代かと考えられる平窯が一基存在しているが分明ではない。中川成夫によって踏査されている。

2 福島県大岡B（文献29）

て約七八糎を算する。煙道は、窯尻の左手前に設けられており、断面円形のものである。窯底は、勾配三度と云うから、ほぼ平坦であると云えよう。

時代は、大凡奈良末〜平安時代とされようが、どちらかと云えば、平安時代の前半に比定することが出来るであろう。



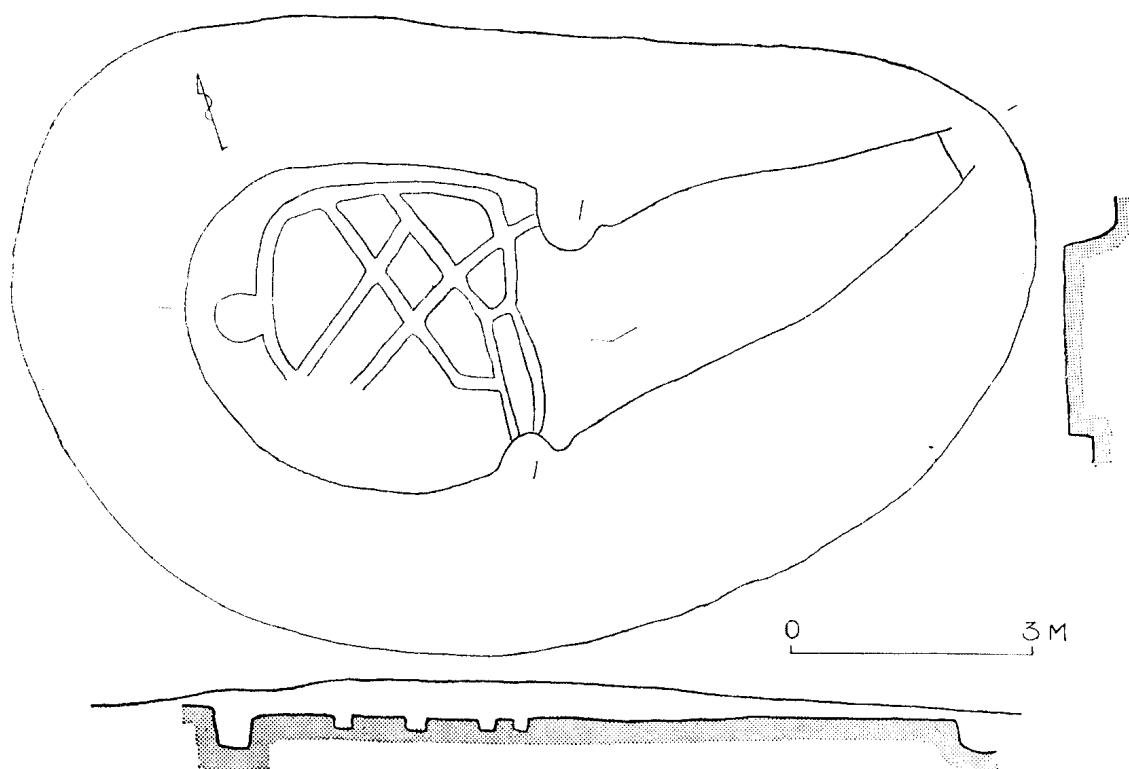
第1図 栃木県 幡張

福島県西白河郡表郷村大岡にあり、小松窯とも云われている。窯は、丘陵斜面の裾を利用して構築されたもので、四条の火道を有する焼成室が確認されているが、未だ報告が公表されず明らかでない。時代は、諸般の観点より考えるに平安時代かと思われる、

3 栃木県 幡張 (第一図、文献16)

栃木県下都賀郡藤岡町幡張(都賀字宮前)の丘陵斜面脚部近くに存在する。昭和三四年一月、大川清によって調査されたものである。

窯は、粘土質地山をくり抜いたトンネル式のもので、平面細長い舟底形を呈し焚口の部分がせばまっている。窯底面全長約六・二米、焚口幅約六〇糎、奥壁底面幅約一米、高さ中央部に



第2図 茨城県上野原

4 栃木県鶴舞山

栃木県佐野市関川町の鶴舞山北面に存在するもので、二基のロストルを有する窯が発掘されている。昭和三九年七月、大川清の発掘によるものであるが未だ公表されてなく分明でない。本窯は、下野国分寺の瓦窯と云われている。なお、窯壁は、瓦埴積みであったと云う。

5 茨城県上野原(第二図、文献9)

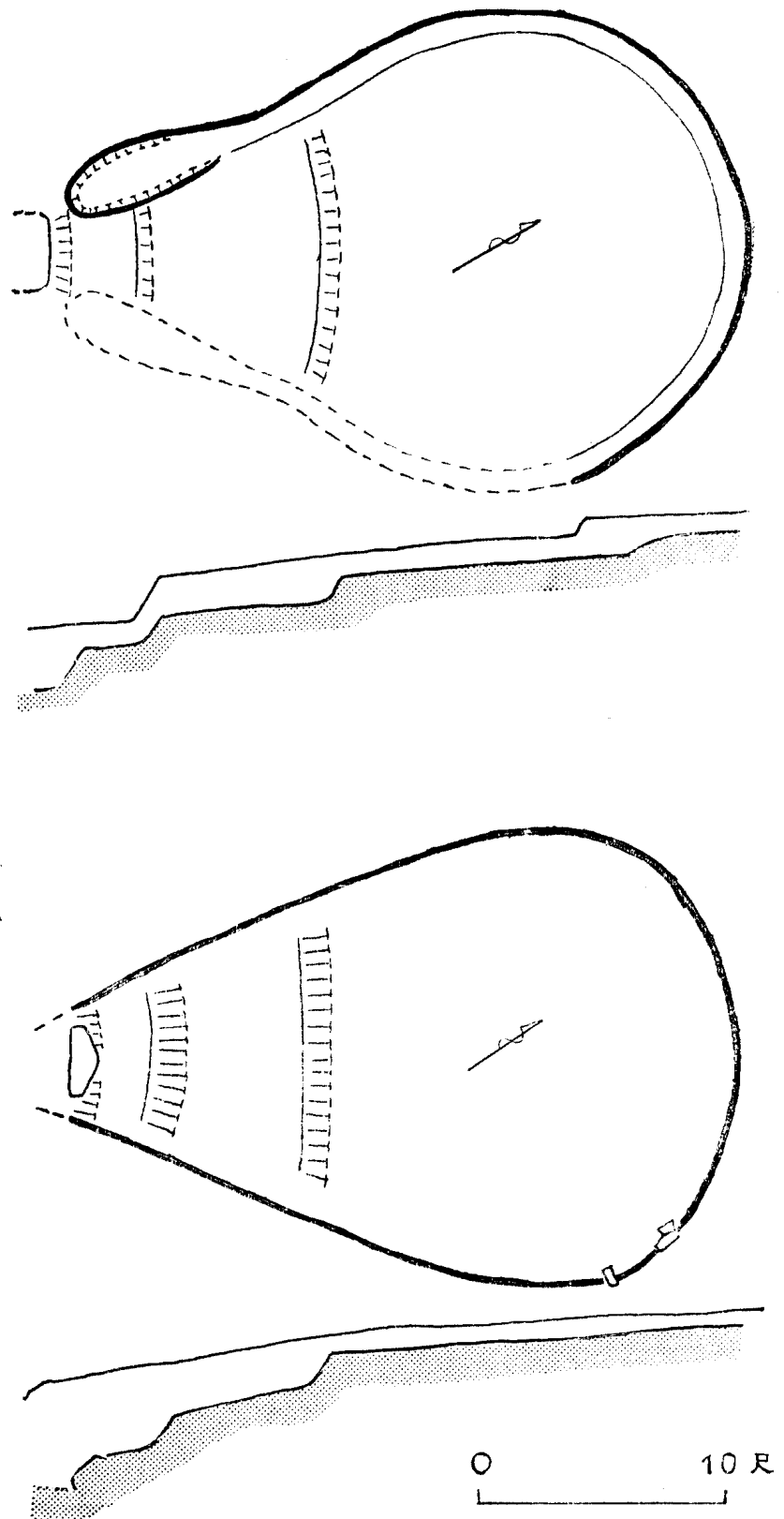
茨城県西茨城郡岩瀬町大字上野原新田字上野原の平坦地に存在する。昭和一五年三月、高井梯三郎によって発掘が行なわれ、一基の窯が発見された。

窯は、発掘前、平坦地に稍盛り上った部分が認められたと云う。焼成室・燃焼室ともに同一レベルにあり、焼成室の窯底に井桁状に火道が走っている。大きさは、全長約一三米、幅約三・六米と云う大なるものである。焚口は、左右両側と前面に三穴あるが、それは、大きさに起因するものである。供給先は、出土古瓦より見て新治廃寺と考えられ、したがって、時代も奈良時代に比定することが出来るのである。

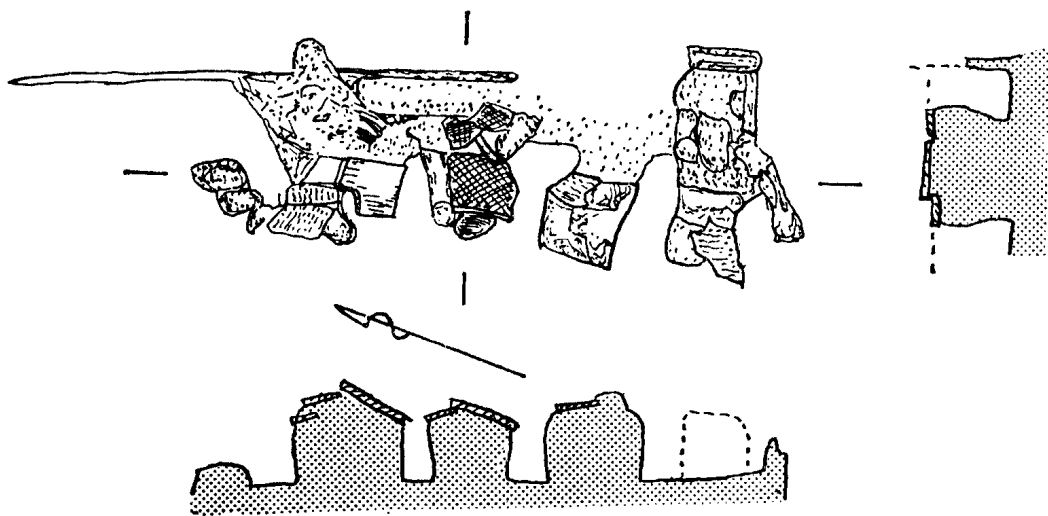
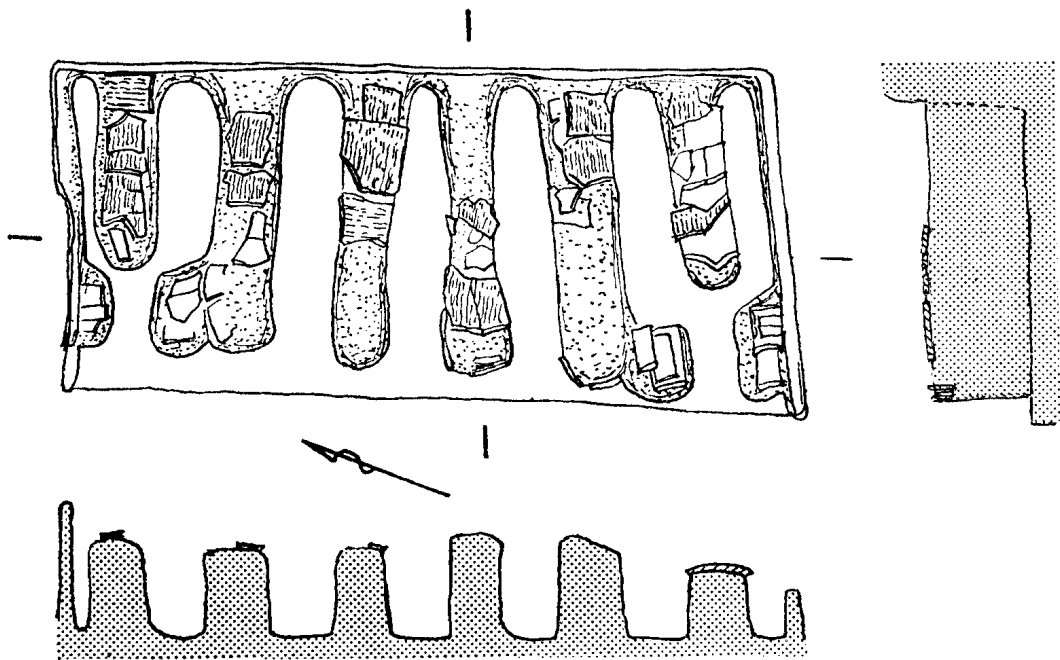
6 茨城県薬師台（第三図、文献11）

茨城県西茨城郡北那珂村字富谷の富谷山南麓裾の緩傾斜面に存在する。昭和二六年に高井梯三郎などによって発掘が実施され、二基の窯が検出された。

第一・二号窯ともに平面卵形を呈する特異なもので、焼成室と燃焼室は高低の段落をもって分離されており、焼成室には、火道などの設備なく平坦なものである。第一号窯は、全長約九・三米、幅（焼成室）約六・七米を有し、第



第3図 茨城県薬師台



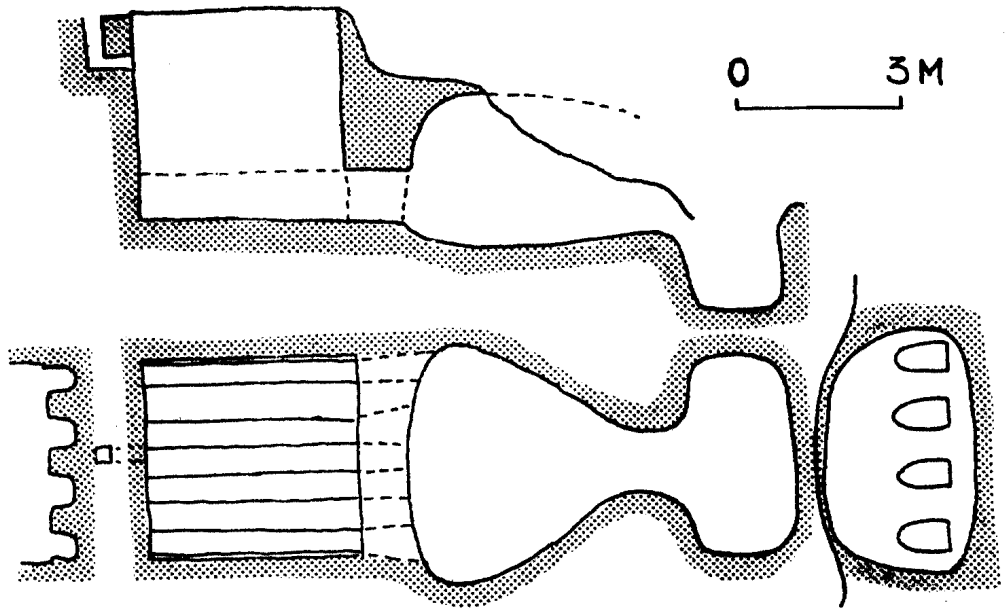
0 50CM

第4図 千葉県左作

二号窯は、全長約一〇米、幅焼成室約六・七米の大きさを有するものである。

燃焼室がとくに複数の段落によって構築され、焚口部より漸次焼成室に向って高くなっていく状態はきわめて特殊な構造とすることが出来るであろう。供給先は、まだ確実ではないが、新治廃寺近

ものである。焼成室には、四条の火道があり、奥壁に方形の煙道がつけられている。焼成室と燃焼室との間には隔壁あり、焼成室の火道より派生する四穴が付設されている。時代は、鎌倉時代の前半とされている。



第5図 埼玉県沼上

くの「伝妙法寺跡」かと考えられている様である。時代は奈良時代とされよう。

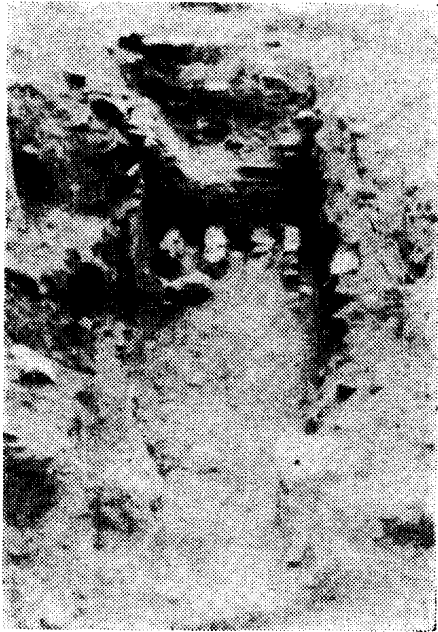
7 千葉県左作（第四図、文献20）

千葉県千葉市大金沢町左作の小丘陵裾に存在する。昭和三三年に大川清などによって発掘が実施され二基の検出を見たものである。

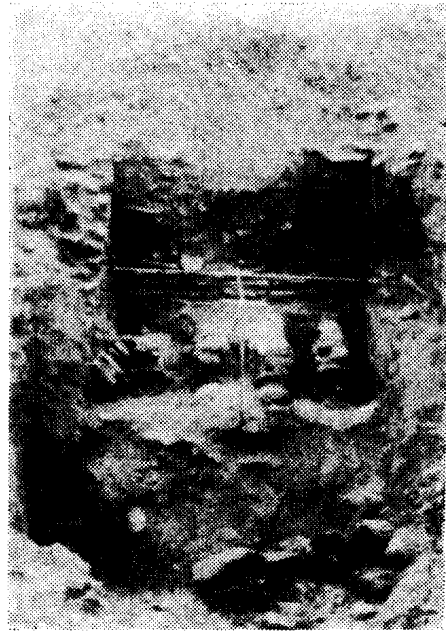
二基とも燃焼室などは破壊され、焼成室のみ残存していたものである。第一号跡の焼成室は、縦約二米、幅約一・九米を算し、横長の方形を呈する。六条の火道を有するもので、本来は、段違いの燃焼室が付属していたものであろう。第二号跡の焼成室は、かなり破壊度がいちじるしいが、四条以上の火道の付せられたもので、ほぼ第一号跡と近い大きさを有するものであったと思われる。供給先は分明でないが、菊間廃寺の可能性あり、時代は平安時代に比定すべきであらう。

8 埼玉県沼上（第五図、文献3）

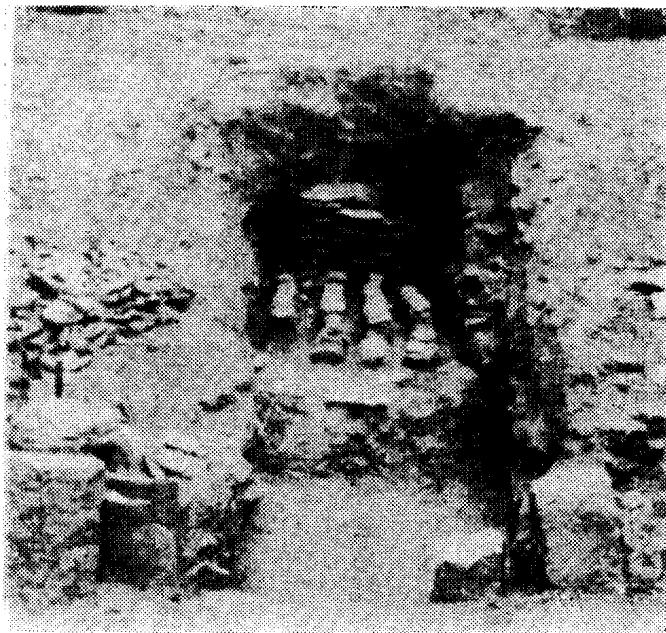
埼玉県児玉郡東児玉村沼上の平坦地に存在する。縦約一・一米、横約一米の方形を呈する焼成室に袋状の平面の燃焼室を付けている



4 号 跡

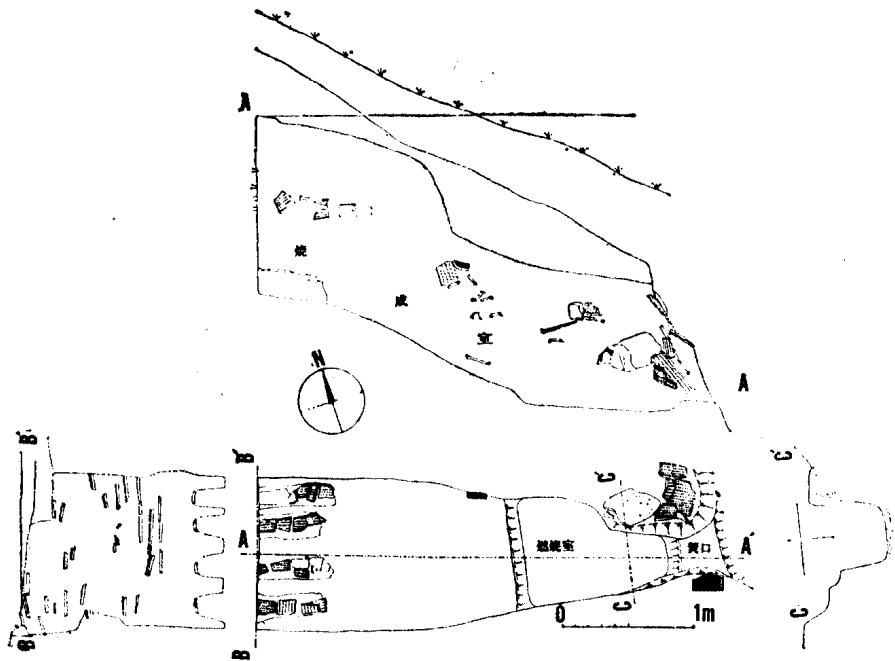


1 号 跡



3 号 跡

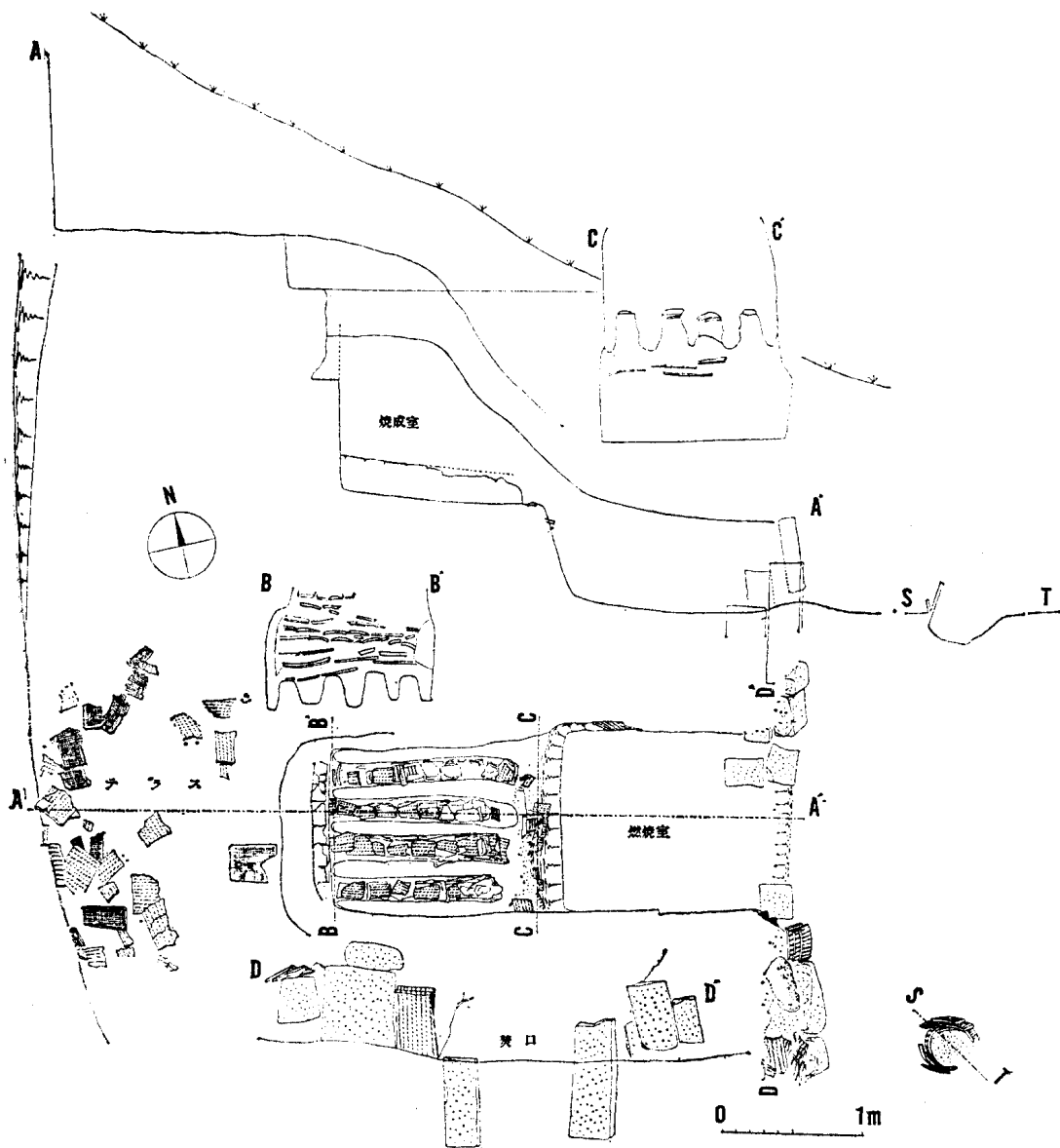
第6図 東京都瓦屋根



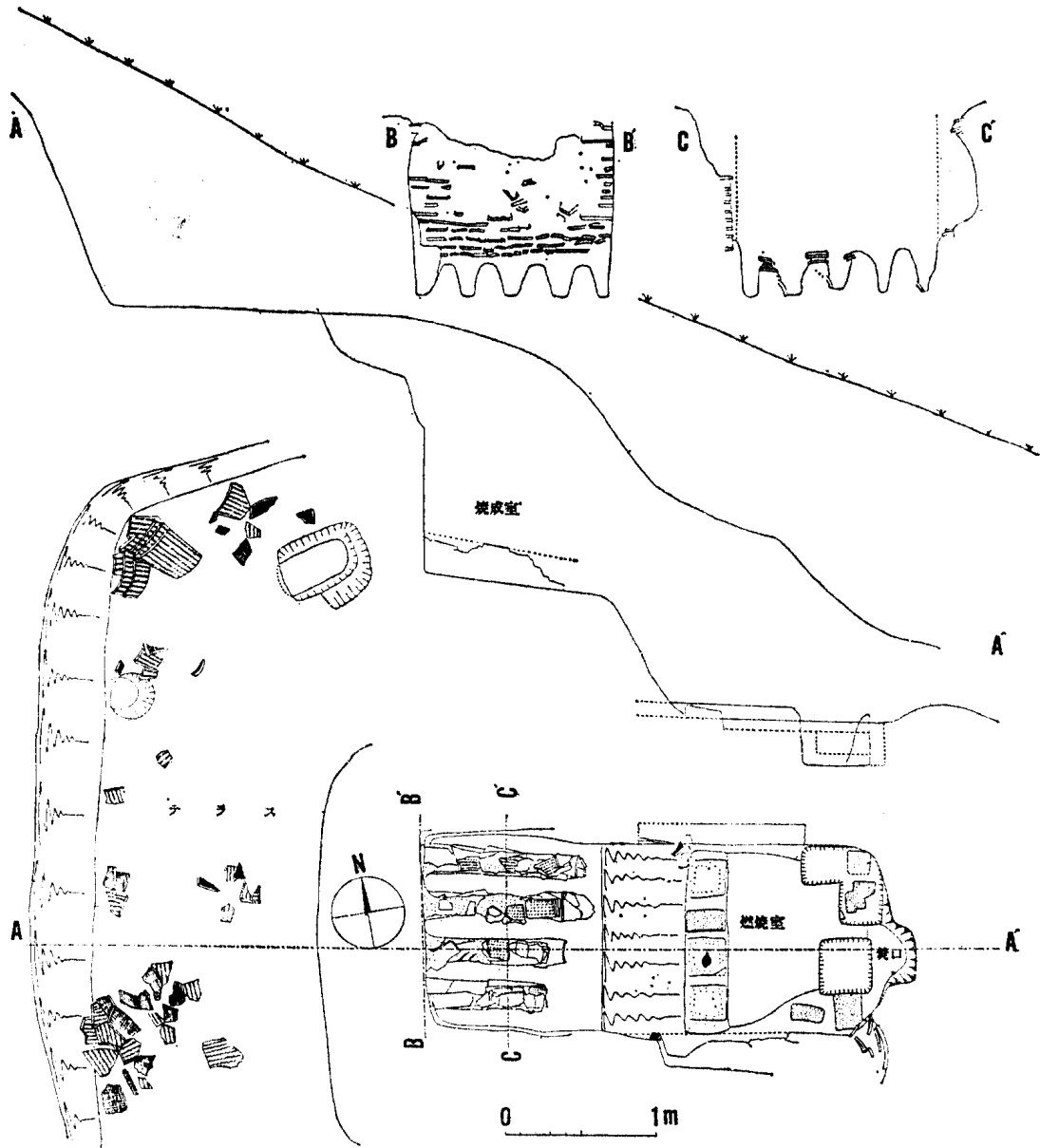
第7-A図 東京都瓦屋根 (1号跡)

9 東京都瓦屋根 (第六～八図、文献14・23)

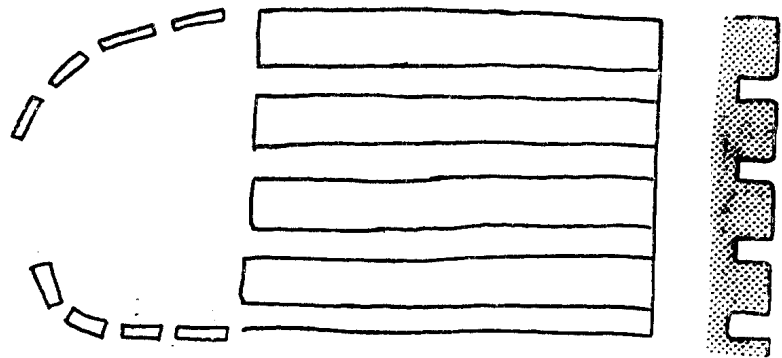
東京都町田市小山町瓦屋根の丘陵傾斜面に存在する。昭和三二・三六年の二回にわたり大川清によって調査され四基が確認され、その中三基が発掘されている。完掘された第一・三・四窯跡については図示しておくので参照せられたい。その中の第三号窯についてみると、焼成室は方形を呈し、大きさは、縦一・五五米、横一・二米を有し、高低段落によって燃成室と分離している。常設の隔壁ないことは一の特徴であろう。焼成室の底面には、五条の火道あり平窯としてかなり形の整っているものである。時代は、平安時代に比定されるもので、供給先は、史跡相模国分寺と考えられている。



第7-B图 東京都瓦屋根 (3号跡)



第8図 東京都瓦屋根 (第4号跡)



第9図 長野県中島

10 長野県中島（第九図、文献2）

長野県北安曇郡会染村中島の平地に存在している。昭和六年五月、江口善次などによって調査が試みられた。

窯は、縦約一・八米、横一・四米の長方形の外郭内に四条の火道が設けられ、廃瓦利用の四条の溝壁が作られている。この焼成室の前（西）方に八枚の女瓦を直立させた半円形の施設があり、その中央部があいているので、これは明らかに燃焼室の役割りを果たしたものと思われる。溝壁高約二七糎、幅約二二糎あり、火道は、幅約一二糎を有する。床面は、ほぼ平坦の様である。

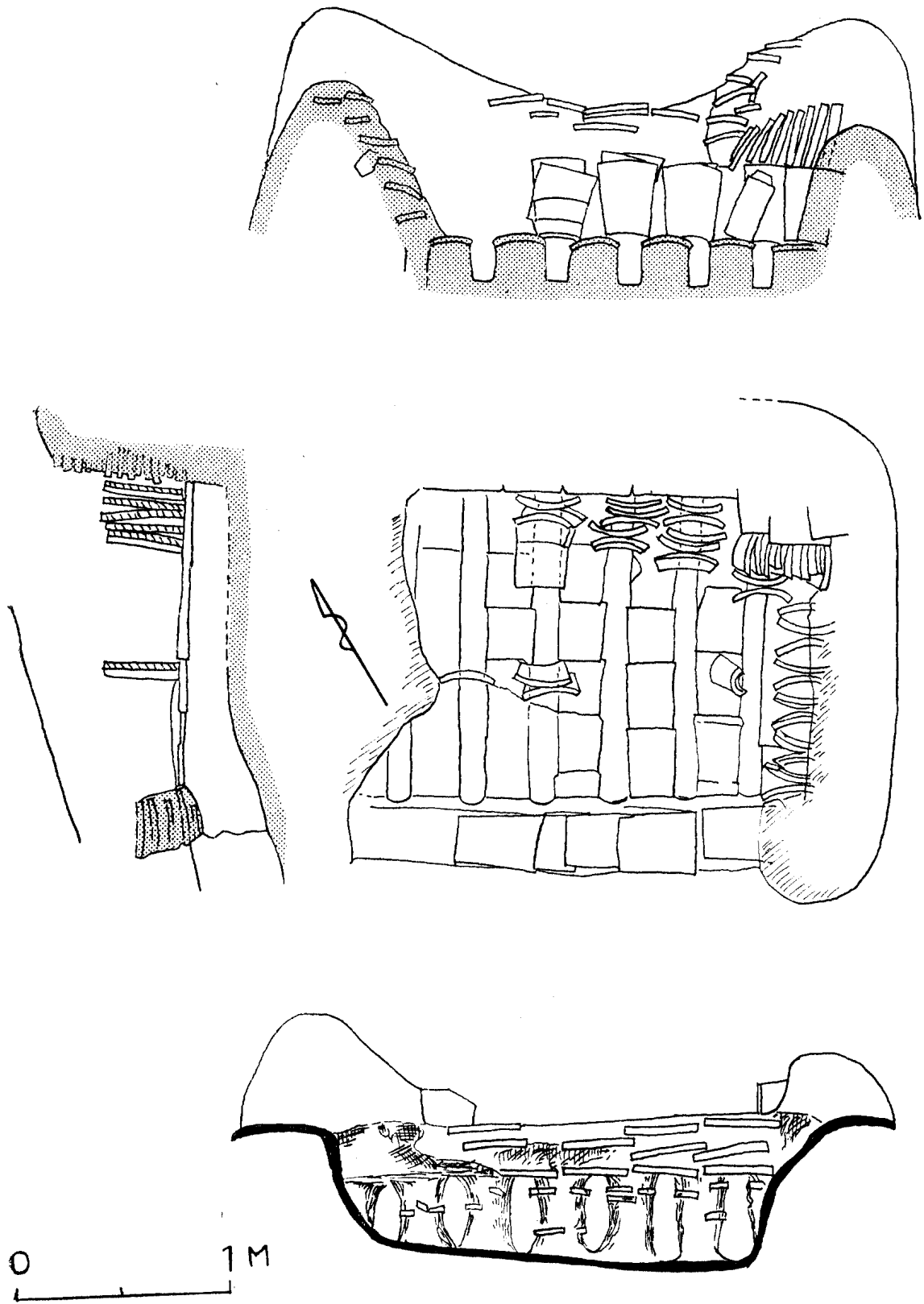
窯中及び周辺出土の鐙・宇瓦よりみて、鎌倉・室町時代のものと想定することが可能である。供給先は分明にすることをえない。

11 京都府栗栖野（第一〇・二図、文献4）

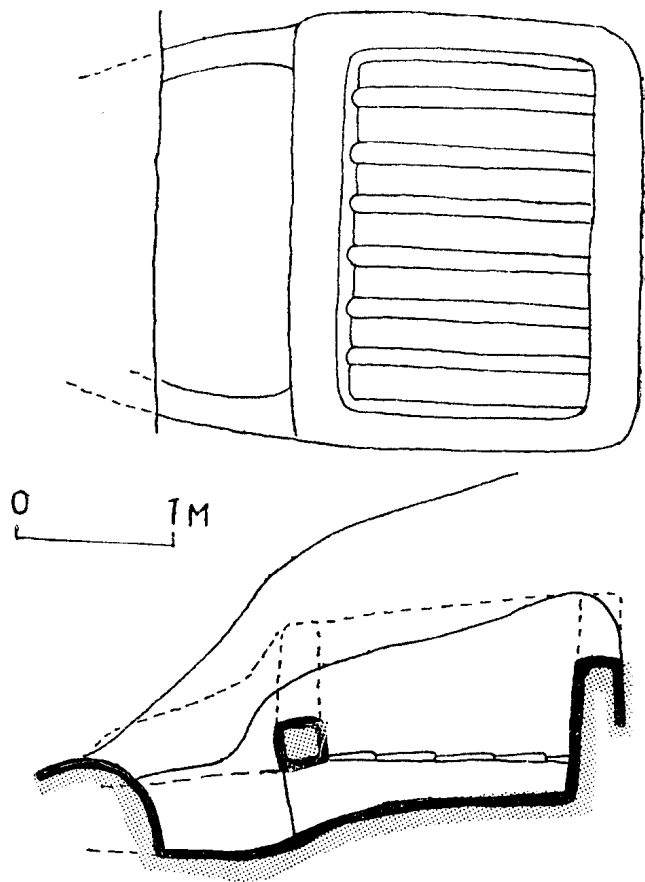
京都府京都市左京区岩倉幡枝町の福枝、南庄田、西幡枝にわたる丘陵中に存在するもので『延喜式』に栗栖野瓦屋とされているものにあたる。昭和五年に木村捷三郎によって発見され、その後梅原末治などによって調査が試みられた。図示するものは福枝第一号窯であって、焼成室は方形を呈し、縦一・五米、横二米の大きさを有する。燃焼室とは段落あり、隔壁が認められる。焼成室の底面に六条の火道あり、この種の平窯として典型的なものであるとされている。出土瓦中に「木工」の刻印あるものあり木工寮の所屬であることが知られる。主として平安宮の瓦を生産していたものであり、緑釉瓦も発見されている。

12 京都府小野（文献25）

平窯についての予察



第10図 京都府福枝第1号跡 <<栗栖野>>



第11図 京都府福枝第1号跡復元 <<栗栖野>>

13 京都府西賀茂 (文献4・32)

前者は、京都府京都市左京区高野小野町のオカイラノ森に存在するもので、『延喜式』に栗栖野窯と併記されている小野瓦屋にあたる。後者は、京都府京都市上京区西賀茂に存在するもので栗栖野瓦屋に包括さるべき性質を有するものである。ともに、窯構造の検出が不可能になり僅かに立地と出土遺物より、平安宮関係の窯であることを知ることが出来る。

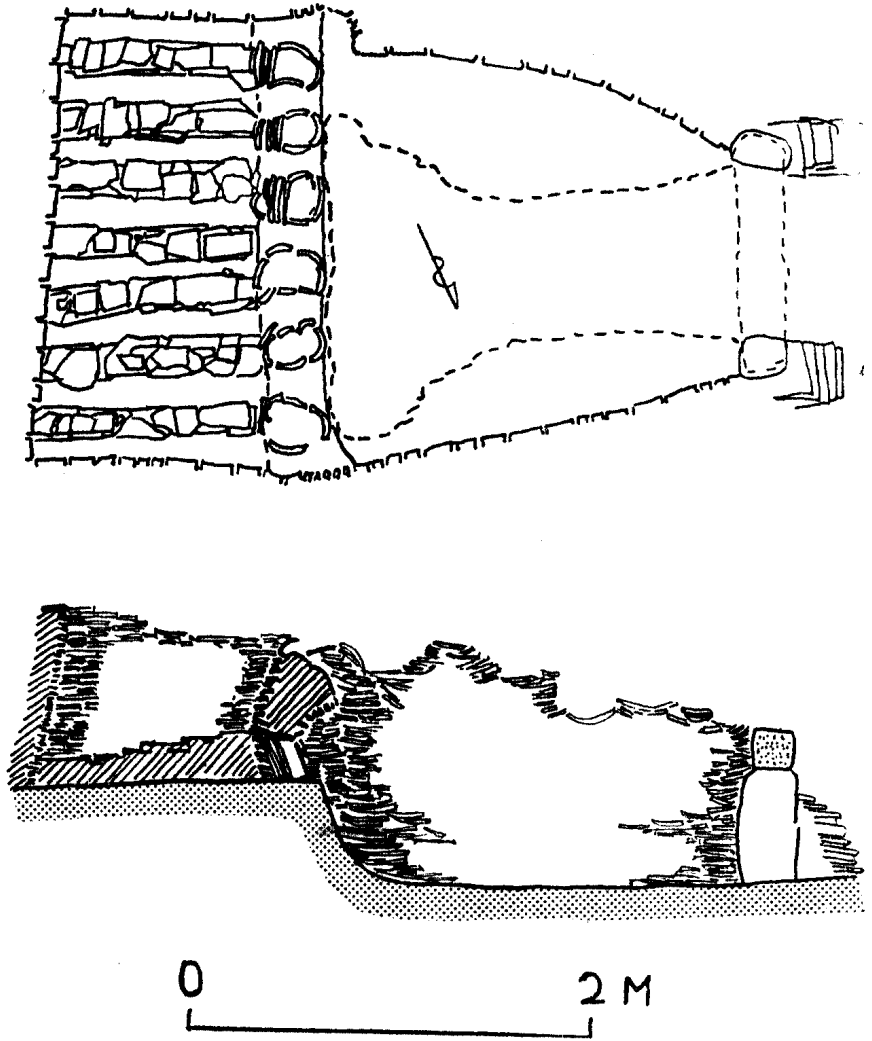
14 京都府法琳寺 (文献26)

京都府京都市伏見区小栗栖北谷町の法琳寺に存在するものであるが、焼成室奥壁外側に四本の煙道設備があると云う点以外は、未発表のため不明である。

15 京都府山田

16 奈良県歌姫 (第一二図、文献18)

京都府相楽郡精華町山田より奈良県奈良市歌姫にわたって群在し、一般に歌姫丘陵瓦窯跡群と称呼されているものである。山田は、昭和二七年頃に発見され未調査であるが、歌姫は、昭和二七年に調査され数基発見されたものである。その中の一基は、女瓦を持ち入り式に積み重ねた窯壁をもつもので焼成室と燃焼室は段違い段落による高低が認められる。焼成室には、八条の火道あるものである。正式報告は未だないが、これらの窯は、平城宮関係の造瓦所と考



第12図 奈良県歌姫

えられている。したがって、奈良時代前半のものであると云える。

17 奈良県唐招提寺 (文献28)

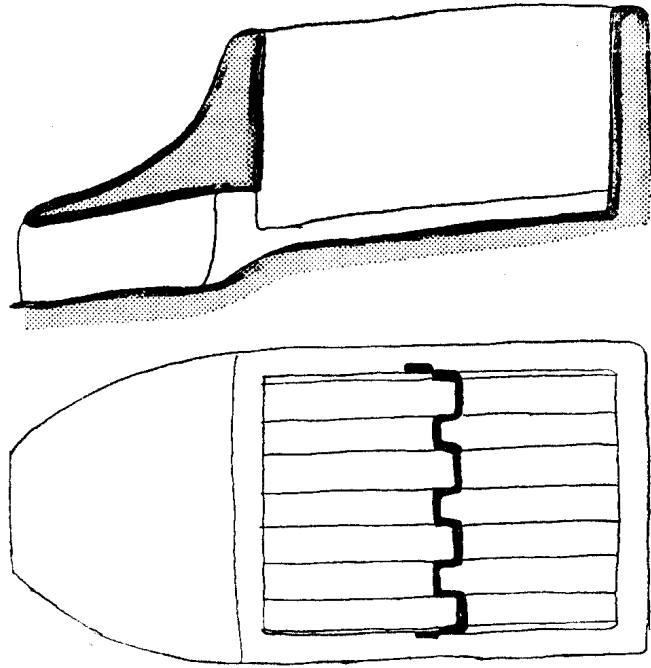
奈良県奈良市五条町の唐招提寺開山堂北裏の平坦地に存在する。昭和三八年、興福寺旧一乗院宸殿の移建によって発見された。方形を呈する焼成室に五条の火道を有するもので、半円形状の焼成室がつけられているものである。時代は、奈良時代の後半に比定され、唐招提寺の瓦窯の一と考えられるものである。

18 奈良県下ノ谷 (文献15)

奈良県大和郡山市山田の下ノ谷に存在したもので四基確認されている。火道をもった形式のものであると思われる。時代は、鎌倉時代とされている。

19 奈良県額田部 (第一三図、文献4・8)

奈良県大和郡山市額田部の緩傾斜面に存在する。昭和三年に発見されたものである。縦約一・三米、横約一米の方形の焼成室には、四条の火道があり、それに半円形状に近い焼成室がついているもので、ほぼ同形同大の窯が三基発



第13図 奈良県額田部

見されている。時代は、平安時代の末葉より鎌倉時代とされているが、この場合、鎌倉時代とすべきであろう。

20 奈良県法起寺

奈良県生駒郡斑鳩町の法起寺境内の平坦地より、石田茂作によって発見・調査されたものであるが未だ報告に接せず分明でない。

21 奈良県橘寺（文献15）

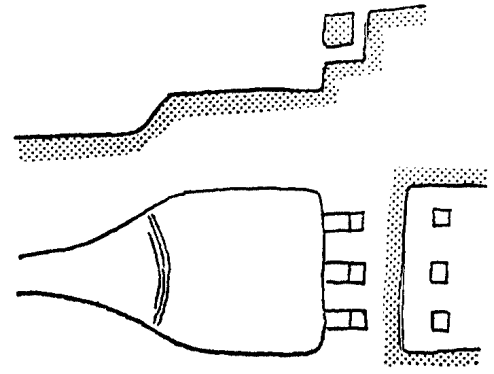
奈良県高市郡明日香村の橘寺境内に位置するものであるが、火道の存在が確認されている以外、すでに破壊されており、詳細については不明である。出土瓦より鎌倉時代と云われている。

22 奈良県豊浦寺（文献33）

奈良県高市郡明日香村の豊浦寺の南方、旧境内にあたる丘陵裾部に存在する。昭和四〇年三月、網干善教の調査によって二基の窯の構造が知られた。元来、本地域には五基の窯の存在が知られて来たが、その中の二基に対する調査が実施され、本窯群の性格を知るに至ったのである。窯は、焼成室の窯底に三条の火道の存在するもので、幅九六糎、高さ八五糎のものであると云う。時期は、鎌倉・室町時代に比定されると云われている。

23 奈良県日高山（第一四図、文献20・21）

奈良県橿原市飛弾町日高山の児童遊園地内の丘陵端部に存在する。北に焚口を開く杓子形の形状を有するもの、窯壁磚積み、奥壁に三個の煙道をあけているものである。全長約三・六米の半地下法によって構築されたもので、天井



第14図 奈良県日高山

は、粘土によって覆われていた様である。時代は、藤原宮創建時の瓦を焼成しているのであるから、奈良時代前期にまで遡ることになる。なお、焼成室燃焼室は同一レベルにあり、また、隔壁の存在もないものである。

24 大阪府吉志部 (文献30)

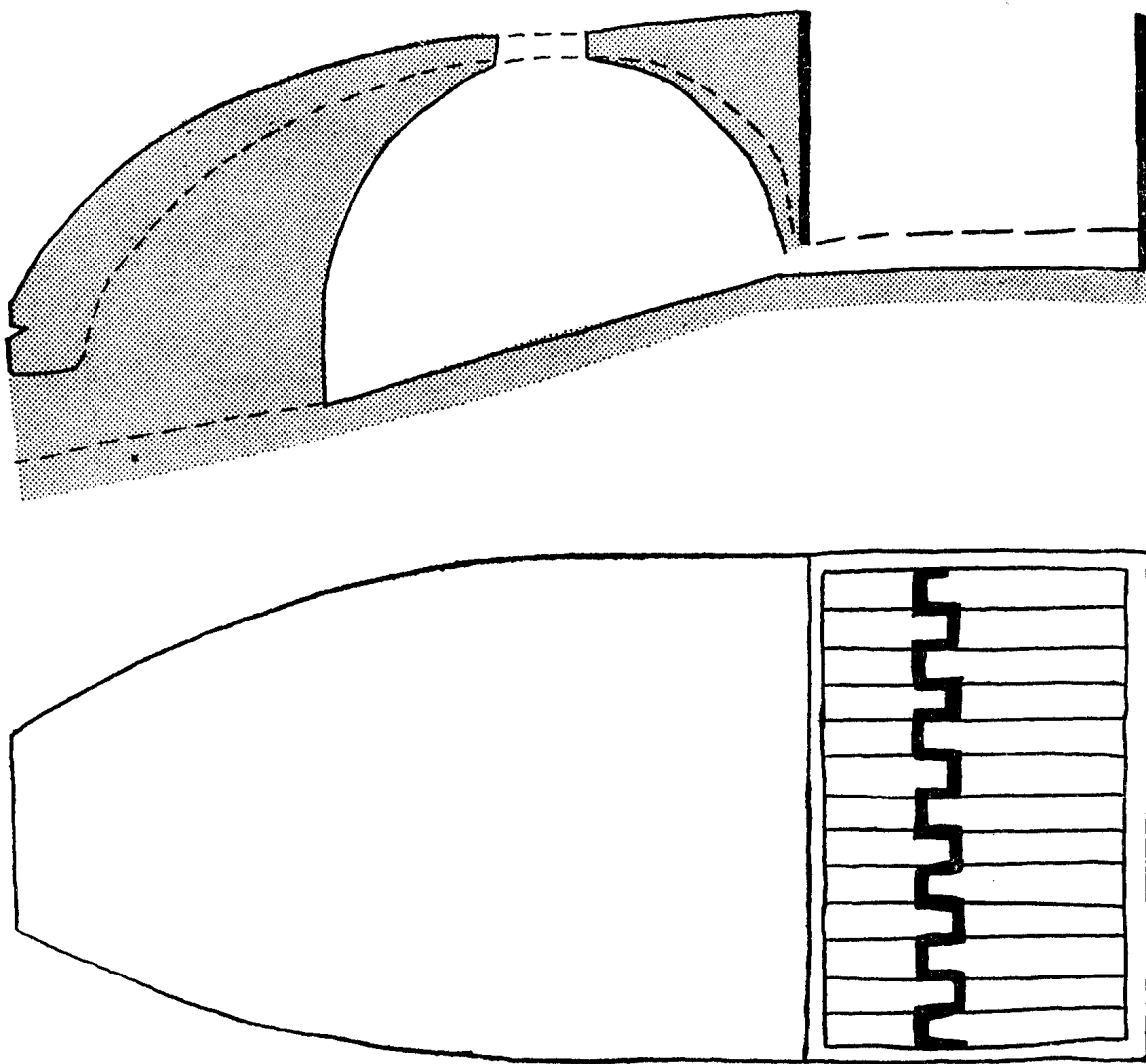
大阪府吹田市小路町の釈迦ガ池南方丘陵の斜面に存在する。古く大正年間よりその存在が一部識者間に知られていた。未発掘であるが四基位あり、第二号窯跡の場合、高低段落ある焼成室と燃焼室の存在が考えられる。なお、本跡よりは、緑釉瓦も出土すると云う。時代は、鎧瓦の文様よりして平安時代の前半に比定することが出来るであろう。

25 兵庫県西山 (文献12)

兵庫県赤穂郡高田村与井宮西山の麓に南面して築造されている。昭和二四年四月、島田清などの調査によるもので、幅一・九米、奥行一・六米の焼成室に大(四条)・小(六条)の火道を二段に配しているものである。側壁には女瓦などを用いていると云う。供給先は若干の出土瓦より与井磨寺であろうと考えられている。

26 岡山県占見 (第一五図、文献10)

岡山県浅口郡金光町占見の緩傾斜地に存在する。昭和二四年に地元の研究家宗沢節雄によって調査が試みられた。窯は、長方形の焼成室に半円形状の燃焼室のつけられているもので、前者の窯底には、七条の火道が認められる。大きさは、一・九五米と一・三五米であり、窯壁中には古瓦片を入れているものである。焼成室と燃焼室は段違いの段落ではなく、傾斜せる燃焼室がそのまま平坦なる焼成室に移行しているもので、隔壁の存在も認められる。時代は、



第15図 岡 山 県 占 見

平安時代の後半頃に比定するのが妥当であろう。

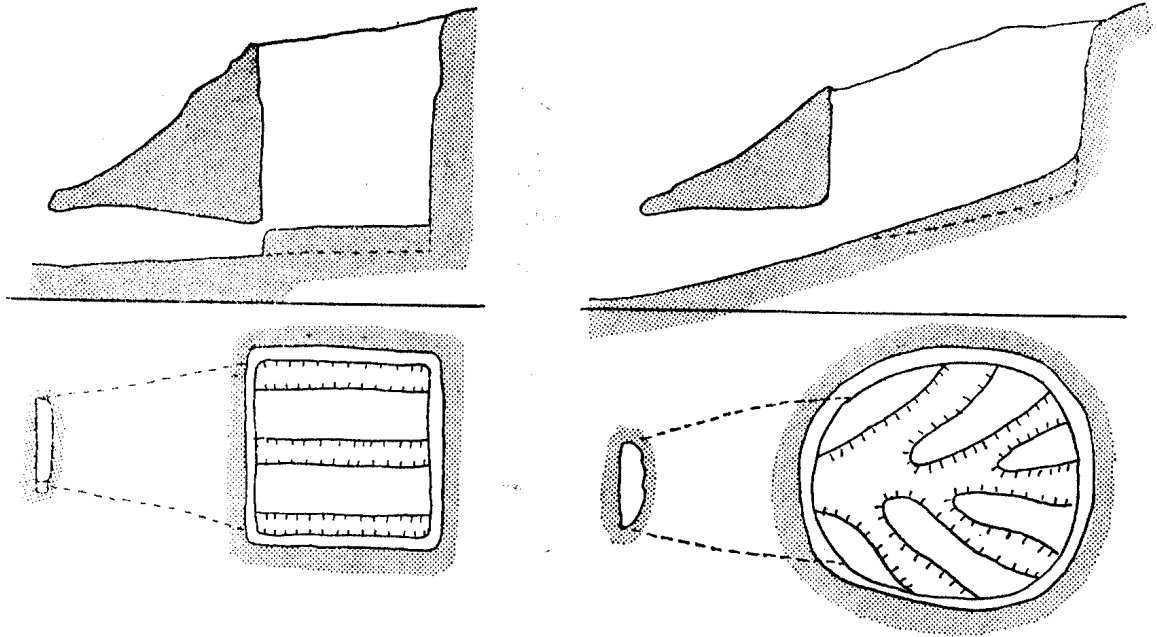
27 香川県二宮（第一六図、

文献1・6）

香川県三豊郡二宮村の大水上神社境内の傾斜面に存在する。大正一四年の発見による。

窯は、二基あり、一は、焼成室円形にして窯底に人手状の火道あり、台形状の燃焼室がついている。二は、三条の火道を有する方形焼成室に台形状の燃焼室のついているものである。大きさは、一号室の焼成室は、長径約一・六米、短径約一・五米を有している。また、二号室は、一辺三・三米位のほぼ方形を呈している。時代は、鎌倉時代とされよう。

28 佐賀県柿園（文献19）



第16図 香 川 県 二 ノ 宮

佐賀県佐賀郡大和町尼寺字柿園の平地に存在し、その地は、肥前国分寺跡の東南約二町の地点にあたる。昭和三六年三月、鏡山猛などによって調査が行なわれ、発見窯三基中の一基について発掘調査が実施された。

窯は、縦約一・五米、横約二米の長方形を呈し、埴積み窯壁の状態が判然とした。煙道は三本あり女瓦を心として構築されていた。焚口付近は遺残状態不良であり詳にしえない。

本窯は、存在位置と出土古瓦の観察よりして、肥前国分寺創建時ないしは、若干下降する時期のものと考えられている。

三 平窯の類型とその展開

平窯の範疇に入れて把握することの可能なものは、焼成室の窯床が平坦面を有していることを前提条件とする。そして、焼成室と焼成室が分離し、焼成室に火道が設備されているのを典型的な平窯として理解したいと考えている。したがって、その立地が平坦地の場合論外として、丘陵斜面に認められる場合にあっても右の条件を具備したものであるならば、平窯としての概念づけをそれに充当して認定したいのである。平窯の類型については、す

でに大川清が三類に分類され、それぞれの類型の遺例をあげ、その展開時について論じられている。大川は、半地下式平窯・ロストル式平窯・トンネル式平窯なる名称をもって論じられているわけであるが、ロストル式平窯なる名称が焼成室に火道設備のあるものについての称呼であるのに対して、他の二類は、窯それ自体の構築法を基準として命名されたものである。すなわち三類に分類せられ命名されたものは、かように統一的な名称づけが果されていないのである。

そこで、筆者は、平窯本来の特質とそれの構造的裏付けを基礎として独自の類型化を試みたいと考えているのである。その分類の主眼は、焼成室と燃焼室との分離構造・隔壁の存否・火道の有無などに立脚している。それによって、従来発見され、学界に報告されている諸例を検討した結果、現在のところ左の六類に分類することが妥当であるとの帰結をえたのである。

第Ⅰ類 焼成室と燃焼室は高低段落をもって分離しているが、その間に隔壁なく、そして、煙道あり、火道なきもの。

第Ⅱ類 焼成室と燃焼室は高低段落をもって分離し、その間に隔壁あり、そして、火道あるもの。

第Ⅲ類 焼成室と燃焼室は高低段落をもって分離しているが、その間に隔壁なく、そして、火道のあるもの。

第Ⅳ類 焼成室と燃焼室とが同一平面上において分離し、その間に隔壁なく、煙道あり、そして火道あるもの。

第Ⅴ類 焼成室と燃焼室は高低段落をもって分離しているが、その間に隔壁なく、そして火道なきもの。

第Ⅵ類 焼成室と燃焼室とが同一平面上において分離し、その間に隔壁なく、煙道あり、火道なきもの。

右を構築法より見れば、第Ⅱ類の一部と第Ⅲ類以外は、すべて半地下式構築であるが、それは、平窯本来の構築法がトンネル式でないことを物語っている。第Ⅱ類の一部のものも厳密に云えば半地下式としてもよいものであり、僅

かに第Ⅵ類の例にのみトンネル式のものを見るに止どまるのである。第Ⅵ類の例は後述するごとく、焼成室が平坦であることよつてのみここで平窯の範疇に入れているのであつて、本来的構築の系譜は、登り窯としてこそ理解される特殊なものである。よつて、平窯は、半地下式をもつてその一の規範とすることが出来るのである。

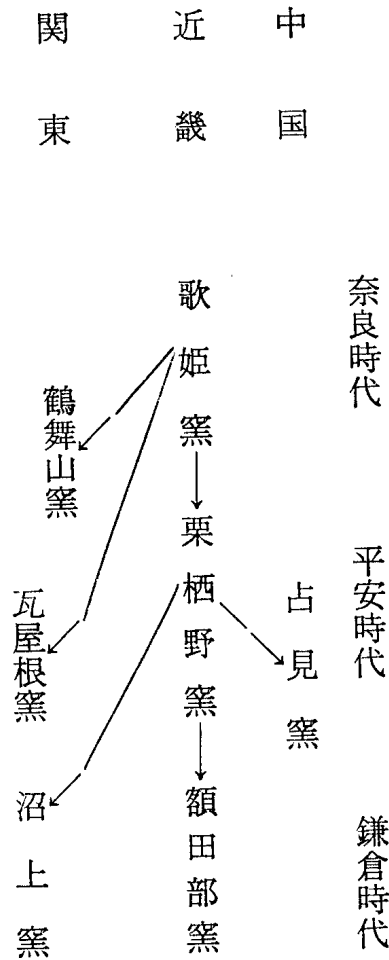
さて、第Ⅰ類に属するものとしては、日高山窯跡をあげることが出来る。日高山窯跡は、藤原宮の瓦窯であつて、創建時のものとする事が出来る。したがつて、その年代は、ほほ、七世紀の末葉に位置づけられる。現在のところ本類の遺例は右の一例に止どまるが、藤原宮関係の瓦窯跡は多くこの種のものと思はれるので、将来において資料の追加がなされることであらう。

第Ⅱ類に属するものはきわめて多い。したがつてそれらの資料を厳密に分類すれば、かなりの細別も可能であるが、本類設定の条件より一応ここでは一括しておきたいと思う。平城宮関係の瓦窯である歌姫窯跡及び山田窯跡、肥前国分寺の瓦窯と考えられる柿園窯跡、下野国分寺の瓦窯と考えられる鶴舞山窯跡などの諸例は、明らかに本類の中でも初現的な構造を有しているもので、その供給先の点より奈良時代の後半頃としてもよいであらう。その発展し、いわゆる平窯として典型的な構造を具備する時期が、平安時代の前半であつて、その好例を栗栖野の窯跡に見ることが出来るのである。その他、吉志部窯跡もこの時期のものであらうし、さらに、占見窯跡もそれらより派生した整備した平窯の地方における姿として認められるであらう。額田部窯跡は、栗栖野の窯の構造をより合理的に整備されたものであつて、それがさらに発展したのが東北地方における大岡B窯跡であり、関東地方に伝播した沼上窯跡、中部地方のそれが中島窯跡、そして四国地方における二宮窯跡となつて各地にその型式を顕現するに至るのである。それらの時期は、ほほ鎌倉時代前半であらうが、地方によつては、室町時代まで下降している場合も考慮されなくてはならないであらう。したがつて、第Ⅱ類としたものの中には、奈良時代より鎌倉・室町時代に至る一連の同構造によつ

て構築されたものが包括されているのであって、それを時間的展開と窯構造の築造技術の各地への伝播現象として把握する必要が存すると云えるであろう。しかし、本類分布の中心は、あくまで近畿地方にあって、平城宮の造営より平安宮の造営に至る一連の宮殿用造瓦窯として発展したのであった。平安宮の完成後、その築窯技術は、近傍の寺院用造瓦の窯としてとり入れられ、それがさらに各地に拡がっていったのである。

第Ⅲ類のものは、第Ⅱ類と構造上近似するものであるが、隔壁の造り付けが認められぬものであり、第Ⅱ類の略式窯とされるであろう。それが、関東地方の平安時代の中頃より後半にかけて認められることは、窯構造の一の地方色として現在のところ理解されるであろう。第Ⅱ類の初現的窯である歌姫窯跡と瓦屋根窯跡群とがきわめて構造的に近いことは、それとの技術的関連も一応考えられることである。

以上の第Ⅱ類と第Ⅲ類との相関関係を地域を分けて考えるとすれば、



とすることが出来るであろう。

第Ⅳ類の例は、上野原窯跡一例が知られているのみである。この窯跡は、あたかも登り窯をそのまま平窯にしたごとき形状を有し、焼成部に火道をつけている奈良時代のものである。上野原窯跡の存在地である常陸は、当時におけ

19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2
額田部	下ノ谷	唐招提寺	歌姫	山田	法琳寺	西賀茂	小野	栗栖野	中島	瓦屋根	沼上	左作	薬師台	上野原	鶴舞山	幡張	大岡B
奈良県大和郡山市額田部	奈良県大和郡山市山田	奈良県奈良市五条町	奈良県奈良市佐紀町	京都府相楽郡精華町山田	京都府京都市伏見区小栗栖北谷町	京都府京都市上京区西賀茂	京都府京都市左京区高野小野町	京都府京都市左京区幡枝町	長野県北安曇郡会染村	東京都町田市瓦屋根	埼玉県児玉郡東児玉村	千葉県千葉市左作	茨城県西茨城郡北那珂村	茨城県西茨城郡岩瀬町	栃木県佐野市鶴舞山	栃木県下都賀郡藤岡町	福島県西白河郡表郷
4	4	1	5 6	1 以上	1	2 以上	?	2 以上	1	4	1	2	2	1 以上	2	1	1
II	II	II?	II	II?	II?	II?	II?	II	II	III	II	III	V	IV	II	VI	II
鎌倉	鎌倉	奈良	奈良	奈良	鎌倉?	平安	平安	平安	鎌倉・室町	平安	鎌倉	平安	奈良	奈良	奈良	平安?	平安?
額田部廃寺?	—	唐招提寺?	平城宮	平城宮	法琳寺?	平安宮	平安宮	平安宮	—	相模国分寺?	—	菊間廃寺?	新治廃寺?	新治廃寺	下野国分寺?	—	—
4・8	15	28	18		26	4・32	25	4	2	14・23	3	17	11	9	大川清発掘	16	29

28	柿園	佐賀県佐賀郡大和町尼寺	3	II	奈良	肥前国分寺	19
27	二宮	香川県三豊郡二宮村	2	II	鎌倉	—	1・6
26	占見	岡山県浅口郡金光町	1	II	平安	—	10
25	西山	兵庫県赤穂郡高田村	1	II?	奈良?	与井麿寺	12
24	吉志部	大阪府吹田市小路町	4	II	平安	—	30
23	日高山	奈良県福原市飛弾町	1	I	奈良	藤原宮	20・21
22	豊浦寺	奈良県高市郡明日香村	5	II	鎌倉・室町	—	33
21	橘寺	奈良県高市郡明日香村	2以上	II	鎌倉	橘寺?	15
20	法起寺	奈良県生駒郡斑鳩町	1	II	鎌倉	法起寺?	石田茂作発掘

四小 結

以上、簡略ではあるが、日本における平窯の類型を六類にわけ、それぞれの展開期間について若干の私見を披瀝して来た。それによって明らかにされることは、平窯出現の時点は、藤原宮創建にあたって認められ、七世紀の後半に位置づけることが出来ると云うことである。わが国に瓦窯技術の移入されたのは六世紀の後半であって、それ以降、登り窯構造の瓦窯が展開していたことは衆知の通りである。登り窯構造による造瓦の生産が盛行していた七世紀の後半、突如として藤原宮創建にあたり平窯構造の窯による造瓦生産が実施されたことは、それなりの理由があつたことであらう。それは、かの唐を範としての宮殿造営のはじまりこそ藤原宮であつたことと密接な関係が存するのであ

ろう。以降、平窯は、平城宮・平安宮と宮殿造営に伴う造瓦の生産に活潑に使用されることになったのであって、この点にこそ、その本来的性格が容認されなくてはならないのである。宮殿造営に伴う建設事業の一環としての造瓦事業が、かの大陸の技術者の招聘によっているからこそ大陸系の平窯が使用されたと考えてよいであろう。すくなくとも半島系の造瓦技術者として来日した瓦博士などの将来した技術は、有段の登り窯の構築技術であった。それは、半島經由の製陶技術と目される須恵器の生産技術とも軌を一にしていることは云うまでもない。

かつて、大陸の窯業技術について、登り窯は華南、平窯は華北と云われていたが、これはまったく確実なる資料による見解ではないのであって、今後における中国側の研究の進展に期待するところ大なるものがある。

藤原宮の造瓦用平窯に認められた窯型式の発展したものが、焼成室に火道を有する平城宮の平窯であり、それが改良されて平安宮における造瓦技術に至っているのである。そして、かの木工寮の採用した造瓦窯が、半島系の登り窯ではなく、大陸系の平窯であると云う事實は、勿論生産瓦搏の合理的量産体制を確立した結果とも目されるが、その裏には、平安時代における唐文化の根強い残英を看取することが出来るのである。

また、肥前国分寺の平窯と下野国分寺の平窯の存在は、ともに正式報告が未発表であるので論究を控えなければならぬが、伝聞するところでは、かの平城宮の歌姫窯より形式的には後出のものであるらしく、平安宮の栗栖野窯との中間に位置づけられるものであるらしい。九州には肥前国分寺の外、筑後国分寺の瓦窯も平窯であることが確認されていると云われていることよりして、平窯の構築技術は、すくなくとも八世紀代にあっては、一種の官衛的掌握の中にあつたと思われる。それにつけても考えだされるのは、筑前国分寺の瓦窯が特殊な登り窯であると云うことである。窯壁に瓦搏を用いていることはきわめて平窯的であり、この点識者の教示を仰ぎたいと思う。九州における七世紀後半以降の瓦窯は、トンネル式有段登り窯が展開しているが、その中において国分寺関係の瓦窯に平窯構造の認め

られることは注目されるのである。一方、東国において八世紀代の平窯と考えられるものは、大川によって調査された下野国分寺のものであるが、下野国分寺の瓦窯は平窯のみでなく登り窯も存在している。この両類の関係が時間差で把握されるものであるか否か今後の研究に期待したいと思う。ただ、隣接せる上野国分寺の瓦窯は、現在のところトンネル式の登り窯であって平窯の存在は知られていない。同じく、武蔵国分寺の瓦窯もすべて登り窯であり、また相模国分寺の瓦窯と称呼されているのでよく誤解されている瓦屋根窯跡の構築年代は一一世紀頃のものであり、決して創建時のものではないと云う事実もあわせ注意されなければならないであろう。

このような平窯構造による造瓦の技術は、平安時代の後半に至って各地に拡がり、鎌倉・室町時代に至っては、遠く奥州の平泉の地にもその姿を現わしている。かかる場合、多くは一寺院の造瓦のため、寺域内に構築されることが支配的になり、それは、とくに畿内における寺院に好例を指摘することが出来るのである。中世における瓦窯の実態については、目下、資料を集成中であり、いずれ、中世瓦窯の概観を試みる一文において平窯の占める位置を検討したいと考えている。

平窯研究主要文献目録

- 1 「大水上神社境内窯跡」(『香川県史跡名勝天然記念物調査報告』第三輯、昭和三年)
- 2 江口善次「北安曇郡会染村発見の布目瓦と窯址」(『信濃考古学会誌』第二年第三号、昭和六年)
- 3 『埼玉県史』第三卷(昭和七年)
- 4 西田直二郎・梅原末治「栗栖野瓦窯址調査報告」(『京都府史跡名勝天然記念物調査報告』第一五冊、昭和九年)
- 5 島田貞彦『造瓦』(昭和一〇年)
- 6 上田三平「香川県二ノ宮窯址」(『史跡調査報告』第七輯、昭和一〇年)
- 7 後藤守一『須恵器2』(『陶器講座』第九卷、昭和一一年)
- 8 岸熊吉「三井窯址及び額田部窯址調査報告」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第一三冊、昭和一四年)

- 9 高井梯三郎『常陸国新治郡上代遺跡の研究』(昭和一九年)
- 10 宗沢節雄「浅口郡金光町占見瓦窯址発見報告」(『吉備考古』第八一・二合併号、昭和二六年)
- 11 高井梯三郎『常陸富谷薬師台瓦窯址の調査』(『甲陽史学会研究報告』第一、昭和二九年)
- 12 島田清「兵庫県赤穂郡西山瓦窯址」(『日本考古学年報』二——昭和二四年度——昭和二九年)
- 13 三上次男・吉田章一郎『窯業』(『日本考古学講座』第六卷、昭和三一年)
- 14 大川清・坂井利明「東京都町田市小山町瓦屋根第一号瓦窯址」(『古代』第二八号、昭和三三年)
- 15 岸熊吉「大和に於ける古代窯跡」(『奈良県史跡名勝天然紀念物調査抄報』第一一輯、昭和三四年)
- 16 大川清「栃木県下都賀郡幡張第一号瓦窯跡」(『歴史考古』第三号、昭和三四年)
- 17 大川清・佐藤俊雄・坂井利明・渡辺賢一「千葉市大金沢町左作瓦窯址」(『古代』第三三三号、昭和三四年)
- 18 藤沢一夫『屋瓦の変遷』(『世界考古学大系』第四卷、昭和三六年)
- 19 鶴久嗣郎「肥前国分寺瓦窯址調査」(昭和三六年度西日本史学会春季大会研究発表『九州考古学』第一三三三号、昭和三六年)
- 20 網干善教「上代瓦窯に関する考察」(『竜谷史壇』第四九輯、昭和三七年)
- 21 網干善教「橿原市飛弾町日高山瓦窯跡」(『奈良県文化財調査報告書』第五集、昭和三七年)
- 22 中川成夫「考古学からみた中尊寺小考」(『大類伸博士喜寿記念史学論文集』昭和三七年、矢崎靖子「岩手県平泉中尊寺伝大池址周辺遺跡出土瓦について」(『物質文化』第三号、昭和三九年)など。
- 23 大川清「瓦窯における技術導入の一例」(『歴史考古』第七号、昭和三七年)
- 24 大川清「瓦窯の形態とその年代(試論)」(『歴史考古』第九・一〇合併号、昭和三八年)
- 25 坂東善平「小野瓦窯址出土の瓦について」(『古代文化』第一〇卷第五号、昭和三八年)
- 26 小林行雄『続古代の技術』(塙選書四四、昭和三九年)
- 27 小田富士雄「上代瓦窯の系譜」(昭和三九年度西日本史学会春季大会研究発表『九州考古学』第二三三三号、昭和三九年)
- 28 堀池春峰「造東大寺瓦屋と興福寺瓦窯址」(『日本歴史』第一九七号、昭和三九年)など
- 29 『福島県史』第六卷、資料編一(昭和三九年)
- 30 鍋島敏也「吉志部瓦窯址発見の瓦」(『古代学研究』第三八号、昭和三九年)
- 31 坂東善平「木工」の文字瓦」(『古代文化』第一三卷第二号、昭和三九年)

- 32 坂東善平「西賀茂鎮守庵瓦窯址出土の瓦について」(『古代文化』第一四卷第二号、昭和四〇年)
33 「豊浦寺瓦窯跡の発掘調査」(『古代文化』第一四卷第五号、昭和四〇年)

追記

- 1 昭和三九年一月、広島県三原市太郎谷において鎌倉時代の平窯と云われる窯が発見されたが、これは明らかに近世の「炭焼き窯」である。一部に平窯の例とされているが誤認である。
- 2 藤沢一夫のご教示によれば「長岡宮」関係の造瓦窯も「平窯」であると云う。本文中に宮殿用造瓦は平窯においてなされていると記述したが、さらにその顕著な例が追加される。藤沢のご教示に感謝する。
- 3 小田富士雄のご教示によれば、九州における国分寺の造瓦窯のほとんどは「平窯」の可能性が大であると云う。今後における調査研究の発展を期待している。
- 4 昭和四〇年九月、広島県庄原市上原町亀井尻において、火道を有する平窯が発見され、広島大学の潮見浩によって口頭発表がなされており、平窯の資料が追加された。